



# 文物考古資料による唐～宋代オールドス地域の歴史的構造の研究

村井, 恭子

---

(Citation)

科研報告書, 15K02894

(Issue Date)

2018-03

(Resource Type)

research report

(Version)

Accepted Manuscript

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010264>



文物考古資料による  
唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究

平成 27～29 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）成果報告書  
（課題番号 15K02894）

代表 村井恭子

2018 年

## はしがき

本書は、平成 27～29 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）「文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究」（課題番号 15K02894）の研究成果報告書である。

本研究が扱うオルドス地域とは、北をゴビ砂漠、南を黄土高原、東を太行山脈、西を河西回廊に挟まれた乾燥地域を指す。ここは、古来、遊牧勢力の居住地であり、また中国内地とモンゴル高原・中央アジア・チベット高原等諸地域間との交流の結節点であるとともに、北方や西方の遊牧勢力との係争地ともなった。

本研究の目的は、中国王朝側・遊牧民側双方向の視点から、7～12 世紀（唐～宋代）の中国オルドス地域を拠点として活動した遊牧諸勢力の実態と、彼らの軍事力によって活性化されたユーラシア東部地域の政治・社会を再構成することである。その分析の手法として、当該地域で発見された碑石・墓誌・文書・崖壁銘文などの文字史料を主要な材料として考察を行うこと、遺址・遺物の現地調査の成果を取り入れることを目指した。

本研究では、代表者の村井恭子（神戸大学）、研究分担者の鈴木宏節（青山学院女子短期大学）および赤木崇敏（東京女子大学）を中心メンバーとし、また伊藤一馬（大阪大学）に研究協力を仰いだ。

3 年間に亘った研究期間のうち、最初の 2 年はオルドス地域の現地調査を行った。1 年目（H27）はフフホトから西安まで、オルドス地域を縦断するルート进行调查した。これは唐宋時代の辺境防衛ラインを北から南へ縦断するものである。各地の文物管理所や博物館を訪ね中国王朝の羈縻支配に関する史料・遺物を調査し、また景観調査を通じて遊牧勢力や中国王朝の情報伝達路・物資運送路を考察した。

2 年目（H28）は、対チベット防衛ラインとなる銀川から固原を縦断し、さらに平涼から西安へ向かうルートを調査した。途中、ソグドやタンゲート勢力の拠点であった塩州・塩湖の白池等へも訪れ、景観や都城・城塞遺跡を調査した。この 2 年間の調査は、榮新江氏（北京大学教授）・王小蒙氏（陝西省考古研究院副院長）・羅豊氏（寧夏考古研究所所長）など中国側研究者の協力のもと順調に行うことができ、また貴重な現地情報も多く得られた。これら中国側諸氏より格別の高配を賜ったことに深謝したい。

最終年度にあたる3年目（H29）は、7月30日（日）に成果報告の国際ワークショップを開催した。このワークショップは中央ユーラシア学研究会「中央アジア学フォーラム」（主催：大阪大学荒川正晴教授）との共催の形式をとり、会場は大阪大学で行った。村井・鈴木・赤木・伊藤の4名が報告を行い、唐五代期の吐谷渾や五代北宋期のタングートのオルドスにおける信仰や生業に関わる生活実態、および各中国王朝の辺境軍事政策のなかの彼らの役割・存在形態について検討を加えた。討論のコメンテーターとして、石見清裕氏（早稲田大学教授）・栄新江氏（北京大学教授）を招聘し、聴衆も交えて議論を深めた。

本書は、このワークショップでの報告内容について、当日の議論やコメンテーターによる評論を参考に編纂したものである。オルドスの歴史展開・人的構成は非常に複雑であり、本研究の実施によって、さらに解明・解決すべき問題が多く存在することが判明した。本研究を基礎として引き続き検討を加えていきたい。

（村井恭子）

## 目次

はしがき	I
目次	III
唐末五代オルドス・河東の党項・吐谷渾関係石刻史料 ——研究状況の紹介と考察——	村井恭子 1
遊牧世界から見た唐代のオルドス	鈴木宏節 25
北宋期のオルドス地域とその軍事的意義	伊藤一馬 37
文書・石窟題記より見る 12世紀オルドスのタングート系集団	赤木崇敏 57

# 唐末五代オルドス・河東の 党項・吐谷渾関係石刻史料 ——研究状況の紹介と考察——

村井 恭子

## はじめに

唐末五代のオルドスとその近辺では、テュルク・党項・吐谷渾を筆頭に活発な政権形成・集団編成の動きがみられる。こうした中国北辺地帯に居住する遊牧民の動きが中国史の転換の原動力のひとつとなったことは、すでに指摘されて久しい。

2000年代に入り、唐～北宋期の党項・吐谷渾関係の墓誌等石刻史料が相次いで公表され、中国ではその紹介および既出の石刻史料とあわせた研究が行われている。しかしながら、日本の学界ではテュルクやソグドに注目が集まり、党項・吐谷渾に関する研究はきわめて少なく、上述の史料もほとんど使用されていない。ここから本報告では、この停滞状況を打開するための初歩的作業として、第一章で中国におけるこれらの石刻史料およびその研究状況について整理・紹介する<sup>(1)</sup>。

唐末五代のオルドスは多民族が入り混じるとともに軍事緊張の高まった時期でもあることから、民族史・軍事史方面の考察が進んでいる。ただし彼らの実態について異なる視角からも考察する必要がある。そこで第二章では、近年公表された石刻史料から、彼らが自称する祖先・貫籍の問題および彼らと官営牧馬業との関係について、若干の検討を加えたい。

## 第一章 オルドス・河東の党項・吐谷渾関係石刻史料の状況

ここでは唐末五代中心に北宋時期まで含めた関連石刻史料の出土状況・資料集や研究の状況などを紹介する。ただし筆者の能力の限界もあり、個人的に注目するもののみを取り上げ、すべての石刻や論文を探索できていないことをお断りしておく。

---

(1) なお、党項・吐谷渾に関する研究については、本稿末尾に文献リストとしてまとめた（附録1）。そのほかの参考文献については、脚注に注記する。

## (1) 概況

[鄧・白 2002]は、新出五代北宋期の定難軍拓跋李氏墓誌発見の第一報として『唐研究』8巻に掲載された論文で、「(李仁福妻) 瀆氏墓誌」「(李彝謹妻) 里氏墓誌」「李彝謹墓誌」「李繼筠墓誌」4点の紹介および考察を行う。これらの墓誌は盗掘犯の逮捕によって押収されたもので、犯人からの聞き取りで一族の墓葬の位置(烏審旗南部の納林河排子湾)も判明した。

この翌年、陝西金石文献石刻滙編シリーズから『榆林碑石』が刊行され、統万城付近などから出土した墓誌の拓本と録文が公表された。墓誌石の情報として出土地・現在の収蔵場所も記される。拓本写真は不鮮明で録文もいくつか不正確なものもあるが、後漢・隋～金・明～民国にわたる夏州近辺地域の状況を示す貴重な史料群である。

党項研究では、従来不明であった開元時期の拓跋氏の状況を解明する情報を含む「拓跋守寂墓誌」のほか、定難軍節度使拓跋李氏一族および定難軍関係者「白敬立墓誌」「劉敬瑯墓誌」「何徳璘墓誌」「康成(此)墓誌」などを掲載し、その民族構成の多様さも含め本書は大いに注目された。

[鄧・白 2002]と『榆林碑石』刊行をうけて、[王 2004]は「拓跋守寂墓誌」を紹介し、[周 2004]は「拓跋守寂墓誌」「李仁宝墓誌」及びその妻「破丑氏墓誌」をとりあげ、墓誌内容について考察を加え、また拓跋氏の族源(族属)問題について論じた(後述)。

これらの墓誌のうち、拓跋守寂・定難軍拓跋李氏関係の墓誌は、2007年に寧夏大学西夏学研究中心を筆頭編者とする『中国蔵西夏文献』18巻(金石編:碑石)に再録された<sup>(2)</sup>。さらに2015年末、この寧夏大学西夏学研究中心所長の杜建録氏による『党項西夏碑石整理研究』が西夏文献研究叢刊シリーズのひとつとして刊行された。杜建録氏は(おそらく寧夏大学の)教員・学生からなる調査団を組織して、榆林・靖辺・横山・烏審旗・武威などの文物管理所を訪問し、再度調査を行ったという。本書は前掲『中国蔵西夏文献』を増補しており、今後碑石を使用して党項・西夏の研究を行う際には必読のものとなろう。

本書の構成は、上篇に「專題研究」として個別の研究論文7篇が掲載され、下篇「碑石整理」には陝西・内モンゴ・寧夏・河南・山東・安徽など中

<sup>(2)</sup> 筆者未見。目次のみ Cambridge University Library の HP で確認したところ、少なくとも唐～北宋の碑石については、唐代の「白全周墓誌」1点を除き、杜建録『党項西夏碑石整理研究』に収録されたものと同じであった(<http://www.lib.cam.ac.uk/mulu/fh98017321751.html#18a> 2017年7月8日閲覧)。内容については文末附録1の①参照。

全国各地に存する党項・西夏関係の碑石 61 点を調査し、拓本写真あるいは碑石の写真、および録文を掲載する。党項・西夏の碑石に関する情報（碑石の大きさ・立石時間や現在の収蔵地点など）は、上篇の「党項与西夏碑石概論」「党項与西夏碑石叙録」の 2 篇の文章に整理されており、有用である。

ただし、今回我々の実地調査において、烏審旗の文管所に所蔵されていた拓跋李氏一族の墓誌は、現在はフフホトの内蒙古博物院に移管されたこと、靖辺の文管所所蔵の碑石は新たに建設される博物館に展示されること、榆林の文管所も文物の量が多くなり、新たに展示室を建造するということが判明しており、収蔵先については今後も変化があると考えられる。

杜建録氏ら寧夏大学西夏学研究中心による碑石収集および研究<sup>(3)</sup>は、西夏研究を中心としているため、前身の党項夏州政権関係は扱うが、府州折氏などの西夏に関わらない勢力のものについては概ね除外される点に留意すべきである。また本書刊行までの間に、杜建録氏らの研究以外にも、[陳 2010・2011・2013・2014a・2015a]や・[杜維民 2014]のように、個々の墓誌についての紹介論文をはじめ、拓跋思恭の状況について史書との比較や「白敬立墓誌」をもとに考察する[牛 2008・2009]や、碑石にみられる定難軍官職を考察する[翟 2015]など個別の論文が多く発表されている。

上述のような大学や研究機関による新出墓誌の公表とは別に、大学院生が自身の出身地の文物調査を行い、修士論文や博士論文において新出墓誌の紹介を行う例もみられる。

修士論文では、白賽玲「横山墓誌研究」（西北大学、2011 年）が、個人所蔵のものも含め現在陝西省横山県内に所蔵される墓誌 17 点について録文と拓本・碑石の写真（附録されないものもある）を紹介し、簡単な考察を加える。墓誌文字の移録や考察については、修士論文であるためやや水準は低い。しかしながら、本論文が収録した 17 点中 13 点が横山県内より出土した墓誌であり、そのうち 12 点が唐五代のもので<sup>(4)</sup>、上述の『榆林碑石』や、横山県党岔鎮の文物を紹介した『上郡膚施初考』と重複するものを除けば、5 点が新たに公表された墓誌である。この点が本論文の大きな功績といえよう<sup>(5)</sup>。

(3) 学術誌『西夏学』『西夏研究』に関連論文が掲載されることが多い。また寧夏社会科学歴史研究所から「西夏研究論叢」のシリーズも刊行されている。

(4) この 12 点のリストは文末附録 1 の②参照。

(5) 本修士論文の一部は陝西第 3 次全国文物普查叢書の陝西文物局編『榆林卷・横山文物』（陝西旅游出版社、2012 年）に引用されている（pp. 106-110）。



本論文が収録する後唐時期の定難軍幕僚「白全周墓誌」については、上述の杜建録氏らの調査団が再調査を行い、個別の論文として[杜・鄭・王 2015]が発表された。ただし、上述の如く杜建録氏らは定難軍・西夏関係に対象を限定するため、そのほかの墓誌については触れられない。たとえば、「竇伯歳墓誌」についてみれば、僖宗乾符年間（874～879）に74歳で死去した墓主は、「夏州左廂兵馬子弟都知兵馬使兼長寧州都督」の肩書きを持つ。その一族は、少なくとも大暦二年（767）前後より夏州に居住し、祖父の竇羅磨・父の竇越磨ともに唐皇帝の勅を受けて「長寧州」の刺史・都督を世襲する「大首領」の家系であった。墓誌には、「公氏族郡在扶風、本西域三苗之後」とある点、長寧州が劍南道瀘州都督府管下の蛮州羈縻州として存在が確認できる点から<sup>(6)</sup>、彼らは羌あるいは「夷獠」と推測される。残念ながら墓誌文は短く、さらに最後の1、2行が摩滅していて判読不可能であるため、彼らがいかなる契機で夏州にやってきたのかは不明だが<sup>(7)</sup>、唐後半期における、夏州藩の軍事力の一翼を担う勢力の存在が新たに確認できる。

博士論文では、高建国「鮮卑族裔府州折氏研究」（内蒙古大学、2014年）があり、著者自身の出身地である府谷出土の石刻を当地の文物管理委員会の協力を得て調査した成果である。とくに折氏勢力を中心に考察を行う。上述の如く寧夏大学西夏学研究中心は府州折氏関係の碑刻をカバーしないので、本論文はこの点で大きな意味を持つ。本論文の内容については次節で述べたい。

そのほか、陸続と出版される石刻資料集のなかに含まれる新出墓誌や、『唐研究』『唐史論叢』『碑林集刊』『西夏学』『西夏研究』などの学術誌で発表される個別の新出墓誌の報告は多数にのぼっており、現在全体状況を把握し、そのなかから関連の石刻史料をピックアップしていくことは、おそらく中国人研究者でも困難な作業となっているのではなからうか。上述のような修論・博論として公表されるものにいたっては、外国人である我々が気づく機会はさらに少ないだろう。各地の中国人研究者との継続的かつ密接な情報交換や協力体制が必要だと思われる。

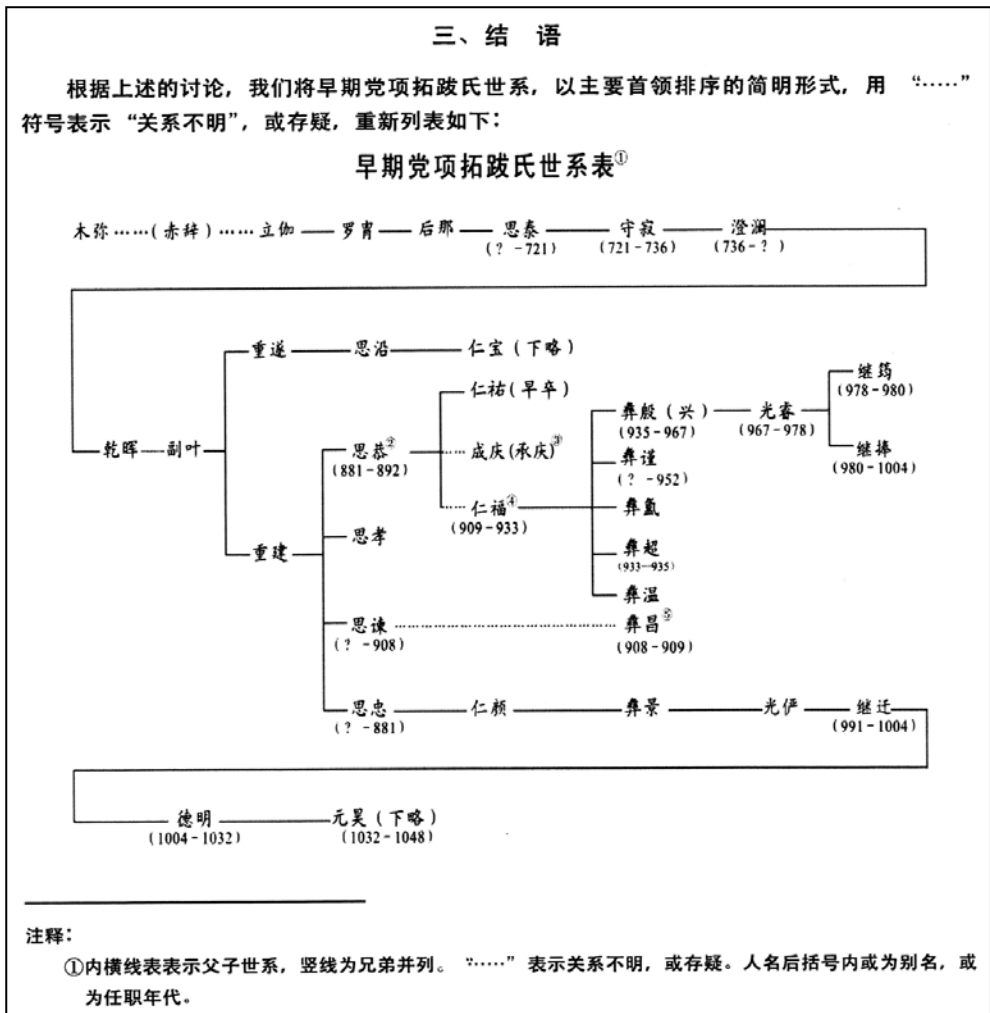
<sup>(6)</sup> 『新唐書』巻43下、地理志羈縻州条、p. 1141。また『旧唐書』巻41地理志劍南道条には長寧州の名はないものの「瀘州、都督十州、皆招撫夷獠置、無戸口・道里、羈縻州」（p. 1686）とある。

<sup>(7)</sup> 墓誌が記すように、大暦年間から夏州にいたとすれば、僕固懷恩の反乱と関わるかもしれない。ただし宋代には、瀘州に依然として長寧州が存在しているので（『統資治通鑑長編』巻166仁宗皇祐元年二月庚辰条、p. 3988 および巻185仁宗嘉祐二年二月己酉条、p. 4486）、竇伯歳らは夏州に徙された一部勢力である可能性もある。

(2) 個別の状況

a. 党項拓跋氏・定難軍拓跋李氏

一連の墓誌発見以降、多くの論文が発表されていることは上に述べたので贅言を避ける。とくに拓跋氏の世系について述べれば、従来新旧『五代史』などの史書に頼るほかなかった状況が飛躍的に改善され、これら史書の誤りも多く指摘された。この世系問題に関しては、周偉洲・湯開建両氏の間で争論となった（[周 2010・2015]・[湯 2013]）。[周 2015]は湯氏の批判に答えつつ以下の世系表を示した（p. 7）。これが現時点で最新のものである。



## b. 府州折氏

拓跋氏のみならず、五代から北宋にかけて府州を拠点に台頭した折氏についても新たな動きがあった。2012年、府谷県文物管理委員会は新たに「折惟正墓誌」「折克柔墓誌」「慕容夫人墓誌」「折克儉墓誌」「折克禧墓誌」「折克臣墓誌」の墓誌石6点および「折惟信墓誌」残誌1点を収蔵したという。これについては、新たに出土したものか、あるいは既出のものが今回文物管理委員会に移管されたのかは不詳である。

従来、府州折氏関係の碑刻については、載応新『折氏家族研究』（三秦出版社、1989年）に紹介されており（『榆林碑石』は本書を参照）、今回、これらに新たな墓誌が加わったことになる。上述の高建国博士論文「鮮卑族裔府州折氏研究」は、上篇は墓誌を用いた研究論文（学術誌にそれぞれ発表）で構成され、下篇は折氏一族を中心とする府谷出土の新旧30種類の墓誌・神道碑の録文および拓本・碑石の写真（全部ではない）を紹介する<sup>(8)</sup>。

この新しい墓誌の「発見」によって、府州折氏研究は近年活況を呈しており、2014年に折武彦・高建国『府州折家将歴史文化研究論文集』が出版されたほか、2015年7月5～7日に府谷において「陝北歴史文化暨宋代府州折家将歴史文化学術研討会」も開催された（[高2016c]）。

具体的な研究方面では、すでに知られていた「折克行神道碑」に加え、新出の「折克禧墓誌」も、自らの折氏一族を「折掘氏」と表記することから、これは附会ではないとし、その族属については鮮卑族、あるいは党項化した鮮卑族という説が提唱され、議論されている。このほか、府州からみた五代北宋の国際関係研究も今後進展が見込まれる。

## c. 吐谷渾関連

安史の乱以降の吐谷渾に関する碑石の出土状況は、涼州や安楽州が吐蕃に没して以降、彼らが確たる根拠地を得られなかったのを反映してか、一方所から大量に出土することはなく、研究状況も党項拓跋氏や府州折氏のような盛り上がりはみられない。そのようななかで、可汗慕容氏一族<sup>(9)</sup>の

<sup>(8)</sup> この30点の碑刻については、文末附録1の③参照。

<sup>(9)</sup> 武威から出土した慕容氏一族の墓誌など従来発見されたものについては李鴻賓「慕容曦光夫婦墓誌反映の若干問題」『唐史論叢』14、2012年、pp. 142-146の一覧表に示される。また、この一覧表に付されないものに慕容宣超の娘の「交河郡夫人慕容氏墓誌」がある。周偉洲「甘肅榆中出土唐交河郡夫人慕容氏墓誌考釈」同著『新出土中古有關胡族文物研究』社会科学出版社、2016年（論文初出2002年）参照。

「慕容環墓誌<sup>(10)</sup>」が西安から発見されたことは朗報といえよう。

墓主慕容環（生没 754～801 年）は、青海国王慕容宣超の孫で父は慕容相とある。つまり嫡流の慕容曦光・曦皓兄弟の異母兄弟の系統に当たる。血統以外にも、この墓誌には面白い点がいくつかあり、たとえば、慕容諾葛鉢（墓誌では諾鉢）から墓主までの男性全員の諱と字を記すこと、父慕容相が安史の乱鎮圧軍に参戦していること、墓主も朔方軍に属していることなどがあげられる。[陳 2014b]は、これらの点も含めて本墓誌と吐谷渾の状況について多角的に考察する。

短期ではあるが、吐谷渾勢力の一つの根拠地として、筆者がかつて考察した李如暹・良僅一族の延州安塞軍がある<sup>(11)</sup>。2010 年に、延安においてこの李氏安塞軍所属の武官であった「羅何含墓誌<sup>(12)</sup>」が出土した。墓主羅何含（生没 773～841 年）は吐谷渾人ではなく、吐火羅人であり「吐火羅国王之密族」「火羅国大首領」の一族だという。墓誌には鉄勒渾部との関わりも記されていて興味深い。[段 2014]では墓主の一族と渾瑊・鎬父子、李如暹・良僅父子との関係について考察する。さらに本墓誌からは、安塞軍管下に党項大姓の野利氏・把利氏の両部落が存在したこと、また両者が対立関係にあったことが確認できる。

唐末五代の吐谷渾に関しては、周知のように、慕容氏以外に赫連氏・白氏の活躍が雲・朔・蔚州の代北地域を中心に顕著となる<sup>(13)</sup>。宋白『統通典』によれば、赫連鐸の部落三千帳は開成元年（836）に新たにオールドス北部の豊州へ移ってきたという<sup>(14)</sup>。森部氏は彼らが 9 世紀半ばに豊州から代北へ移住したと述べる<sup>(15)</sup>。2012 年に公開された「王宰墓誌<sup>(16)</sup>」には、昭義節度使劉稹の反乱（843～844 年）討伐における墓主王宰の功績が記される

(10) 西安市長安博物館編『長安新出墓誌』文物出版社、2011 年、拓本 p. 238 録文 p. 239。墓誌題「故朔方副元帥防秋兵馬使金紫光祿大夫張掖郡王慕容府君墓誌銘并序」。

(11) 拙稿「唐吐蕃回鶻並存時期的西北辺境—以《李良僅墓誌銘》為中心」『文史』2009-4、pp. 133-149。

(12) 墓誌題「唐故左神策延州防禦安塞軍都虞侯兼教練使銀青光祿大夫檢校太子賓客兼監察御史上柱国羅君墓銘并序」。録文・拓本は[段 2014] 参照。

(13) 唐末～北宋初期の吐谷渾の状況については、周偉洲『吐谷渾史』第 7 章、広西師範大学出版社、2006 年（原版 1985 年）、[森部 2010] 第 2 節参照。

(14) 『資治通鑑』卷 282 後晋高祖天福五年十二月末尾条の胡注所引宋白『統通典』に「赫連鐸以開成元年將本部三千帳來投豊州、文宗命振武節度使劉沔以善地処之。及沔移鎮河東、遂散居川界」とある（p. 9219）。

(15) [森部 2010, pp.219-220]。

(16) 墓誌題「大唐故檢校司空太子少傅贈司空太原王公府君墓誌銘并序」。齊運通編『洛陽新獲七朝墓誌』中華書局、2012 年、p. 363 に収録。

が、王宰率いる部隊のなかに「黄頭先鋒将趙峯・赫連權等」とある。黄頭とは忠武軍節度使（治所許州）管下の黄頭軍を指す。9世紀以降、赫連姓が吐谷渾以外にみられないことから、この赫連權は吐谷渾人の可能性がある。もしそうだとすれば、開成年間に内遷してきた赫連部落も沙陀の如く唐朝によって各地に分散配置されたのではなかろうか。

さらに、北宋初期の「赫連瑠墓誌<sup>(17)</sup>」も発見されている。墓誌文には、  
其先自北虜右賢王去卑之後、劉元海之族也。昔後魏時、乃于天成歲称王於朔方、立号開国、承家於斯為裔、即青州成陽郡氏、世充厥職、宗派盛焉、今為潞人也。

とあり、墓主赫連瑠（924～977年）は劉元海・赫連勃勃に連なる匈奴系の人と記す<sup>(18)</sup>。ただし、唐末五代の河東北部の状況に鑑みれば、吐谷渾赫連氏と考えられる。周偉洲氏は、吐谷渾とは、多くの異なる民族が吐谷渾政權の統治下で次第に形成され、北周から隋初に完成した新たな民族共同体であると述べ<sup>(19)</sup>、吐谷渾の赫連姓は鉄弗匈奴、すなわち劉元海・赫連勃勃の系統を指すという<sup>(20)</sup>。上掲の誌文では、自らを劉元海・赫連勃勃の直接の後裔とする点は附会であろうが、周氏の説に従えば、そのルーツ自体は誤りではないのかもしれない。

墓誌文全体では、赫連瑠の家族構成については詳しいが、本人およびその祖父・父の官職や具体的な活躍をほとんど記さない。また彼らがいつ潞州にやってきたのかも不詳である。少なくとも赫連瑠が成人してから死去までの間に、後晋・後漢・後周・北宋の王朝交代があるが、この間に昭義軍（昭徳軍<sup>(21)</sup>）に属したという。ただし、軍内のどの職位であるかも記されない。

とくに潞州に注目して推測すれば、以下の状況が考えられる。『続資治通鑑長編』巻1、建隆元年（960）六月条に、「初、吐渾府都留後・汾州団練使王全徳、帥所部從李筠戰沢州南。既敗走入潞州……」（pp. 16-17）と、宋に反抗する旧北周昭義節度使李筠のもとへ吐谷渾を率いる王全徳が加

(17) 墓誌題「大宋昭徳軍故赫連府君墓誌銘并序」。趙力光主編『西安碑林博物館新蔵墓誌彙編』3、線装書局、2007年、拓本p. 975、録文pp. 976-977に収録。

(18) 『晋書』巻130 赫連勃勃載記に「赫連勃勃字屈子、匈奴右賢王去卑之後、劉元海之族也」（p. 3201）とある。

(19) 前掲周偉洲『吐谷渾史』pp. 155-156。

(20) 前掲周偉洲『吐谷渾史』pp. 152-153。

(21) 『続資治通鑑長編』巻17 太祖開宝九年（976）十月壬戌条に「有司言官階州県名与御名下字同者、皆改之、……昭義軍為昭徳軍」（p. 383）とあり、赫連瑠の死去の前年に改名された。

勢したが、宋軍に敗れて潞州に逃亡した。最終的には王全徳の一派は宋へ投降する。周偉洲氏は王全徳を、後漢の時に吐谷渾白承福余部を吸収した別部吐谷渾の王義宗の後裔と推測する<sup>(22)</sup>。白承福率いる集団には赫連姓も含まれたから<sup>(23)</sup>、赫連瑠一家は王全徳集団に帰属しており、王全徳が宋へ投降したのち、彼らはそのまま昭義軍（昭徳軍）に配属された可能性がある。墓誌に具体的な官職や活躍の記載がないのは、赫連瑠の一家が、唐末から北宋の複雑な状況下で、ある勢力からある勢力へ帰属先を変えながら生きていたためではないだろうか。

吐谷渾白氏については、[森部 2010]によって、定州市博物館所蔵の北宋至道元年（995）の紀年がある石函に、白姓吐谷渾の人名が刻されていることが紹介された。森部氏は、彼らが唐末五代に代北に居住し、沙陀などの王権に従属していたが、北宋において禁軍に編成され、定州という対遼最前線地帯に配置された人々であると指摘する。

この宋代石函については、筆者も 2015 年に調査のため定州市博物館を訪れたが、あいにく浙江省の展覧会に出展中で調査できなかった。その後、河北省社会科学院の馮金忠氏を介して河北省博物院の郝建文氏より拓本写真 3 枚の恵与にあずかった。森部氏（および福島恵氏）の調査では、第 3 側面はほとんど確認できない状況だったが、この拓本により全体の内容がほぼ判明した。筆者は、この 3 枚の拓本写真から録文を作成し、本稿末尾に掲げた（附録 2 [縦書き 2 段・逆ページ配列]）<sup>(24)</sup>。ただ、筆者が提供を受けた拓本写真は 1 面 1 枚のもので画素数がやや粗く、判別困難な文字も多くあり、さらに、上述の如く筆者は石函本体を実見していないため、[森部 2010]の見解と合わせて検討する必要がある。

この石函の銘文には「吐渾指揮使」や「吐渾使」といった官名が記されるために、白姓の人々が吐谷渾だと判明するのだが、じつのところ、唐末五代の史書や墓誌には素性不明の白姓の人物が多く存在する。このうち、南陽を貫籍とする白姓については次章で考察したい。

---

(22) 前掲周偉洲『吐谷渾史』p.199。

(23) また、白承福と行動を共にする吐谷渾部落長に赫連海龍もおり、後晋開運三年（946）に白承福・赫連海龍らが劉知遠に誅された際、白承福の余部に赫連海龍の部落民が流入していても不思議ではない（『旧五代史』卷 84 後晋小帝紀、開運三年八月癸酉条、p. 1117）。前掲注の宋白『統通典』にはさらに「其後吐谷渾白姓皆赫連之部落」とあり、この両者は近い関係にあるとみられる。

(24) 拓本写真については、公開可能か判断できなかったため、一部分のみ掲げた。

## 第二章 実態 —祖先・貫籍と生業—

### (1) 祖先・貫籍・自己認識

オルドスや河東の複雑な歴史や民族構成から考えると、本当の意味での血統や族属は解明不可能であろう。筆者の関心は、彼らが自己をどのように考え、他者へ発信していたか（この両者は一致しなくてもよい）、反対に他者が彼らをどのようにみなしていたのかという点にある。というのも、こうした認識が時には彼らの行動に影響を与えた面もあると思われるからである。

#### a. 党項拓跋氏

前章の墓誌に関して、注目された問題のひとつは党項拓跋氏の族属問題である。これについてはすでに詳しく議論されているので、ここでは簡単に状況を紹介したい<sup>(25)</sup>。正史や林宝撰『元和姓纂』などの文献史料において、拓跋守寂や西夏を建国した拓跋李氏を鮮卑族とする記事と党項（羌）族とする記事が両方存在したため、その出自をめぐる 1950 年代より学界で論争が起こっている。しかし、拓跋守寂および一連の拓跋李氏墓誌の出土により、状況がより明らかになった。

墓誌では、開元年間の拓跋守寂は「出自三苗、蓋姜姓之別」とあり、羌の出自を伝える。これにより『元和姓纂』が拓跋守寂を北魏に連なる「東北蕃」とする記事が誤りであったことが明らかとなった。また一方で、唐末～北宋期の拓跋李氏墓誌ではいずれも北魏の後胤を主張する。ただし、彼らの墓誌には党項大姓の破丑氏との通婚がしばしばみられ、党項とみなすべきであろう。興味深いのは、李仁宝の妻破丑氏までもが「元魏靈苗、孝文盛族<sup>(26)</sup>」を称する点である。ここから、唐末五代には破丑氏を含む定難軍上層部の党項と北魏皇統の鮮卑とを混淆する認識が存在し、李元昊が建国の際に北宋に送った上表文において北魏の皇統を自称した<sup>(27)</sup>ときには、すでにそれが定着していたとみられる。

ただし、これが彼ら自身による附会なのか、他者による認定を受け入れたものかは判断が難しい。周偉洲・杜建録両氏は、唐末に新羅人崔致遠が拓跋思恭を北魏の後裔とみなす文章を記すことから<sup>(28)</sup>、上述『元和姓纂』

<sup>(25)</sup> [鄧・白 2002: p. 391][周 2004: p. 258-260][杜 2013: p. 41-42 ]に詳しく述べられている。

<sup>(26)</sup> 「故永定破丑夫人墓誌」後唐長興元年（930）立石。『榆林碑石』拓本 p. 77, 録文 p.247、『党項西夏碑石整理研究』pp.89-91。

<sup>(27)</sup> 『宋史』卷 485 夏国伝。

<sup>(28)</sup> 崔致遠「賀殺黄巢賊徒状」『桂苑筆耕集』卷 6（中和三年[883]作。党銀平校注『桂苑筆耕集校注』中華書局、2007 年、pp.136-137）。

の誤記が後代に大きな影響を与えたと指摘する。ただし周氏は、拓跋李氏が漢化と軍閥化の過程で自らの出自の権威化のためにこれを利用したとみなし<sup>(29)</sup>、杜氏は、『元和姓纂』の誤記が彼らに受け入れられ、さらに誤ったまま後世に伝わり自己定義化に至ったとみなす<sup>(30)</sup>。

拓跋李氏が自らの出自の権威化のために北魏の後裔を名乗ったのであれば、それには対象が存在するはずで、それは宋朝だけではなく周囲の勢力や定難軍内部の人々であったと考えられる。上述のように、府州折氏においても族属問題が議論されているので、同時代の両者の状況をふまえ、彼らの墓誌文の表記法や自己認識を比較・検討する必要があると思われる。

#### b. 定難軍幕僚の南陽白氏と唐末五代の白氏

拓跋李氏の定難軍幕僚には南陽白氏を名乗る唐末の白敬立（851～893年）と唐末～後唐期の白全周（868～929年）の存在が確認できる。しかし、唐五代において南陽を貫籍とする白氏は文献史料や石刻史料両方で検索しても非常に少ない。白姓自体、記録に残る例が少ないのだが、そのなかで多くみられるのは白居易の一族を含む太原白氏である。これら唐代の白氏の墓誌をみると、祖先を戦国時代秦の将軍武安君白起に繋する傾向がみられる<sup>(31)</sup>。一方、南陽を貫籍とするのは張氏が圧倒的に多く、樊氏や韓氏も多くみられる。

では、李潜撰「白敬立墓誌<sup>(32)</sup>」をみると、

公諱敬立、字□、秦将軍武安君起之後。武安君将秦軍、破楚於鄢郢、退軍築守於南陽、因而号其水為白水、始称貫於南陽。武安君裁有坑道趙之功、為相君張祿所忌、賜死於杜郵。其後子孫淪棄、或逐扶蘇有長城之役者、多流裔於塞垣。公家自有唐泊九世、世世夏州武官……。

と、その祖先を武安君白起とし、南陽を貫籍とした経緯や白敬立一家が北辺（夏州）に居住する遠因までも記される。一方、牛渥撰「白全周墓誌<sup>(33)</sup>」は、

公諱全周、字普美、即唐礼部侍郎居易之後、因官、流散子孫異鄉焉。

(29) [周 2004: pp. 259-260]。

(30) [杜 2013: p. 42]。

(31) 周紹良編『唐代墓誌彙編』（上海古籍出版社、1992年、続集2001年）で検索したところ、太原白氏では白居易の一族の白敏中（続・咸通005）、太原祁県の白羨言・白慶先父子（開元419・417）、太原晋陽の白敬宗（続・乾符030）がみられ、ほかに岐邑郿山の白義実・白知礼父子（開元408・415）がみられる。

(32) 『榆林碑石』拓本 p. 75, 録文 pp. 242-243、『党項西夏碑石整理研究』 pp. 83-85。

(33) 『党項西夏碑石整理研究』 pp. 86-88。



とあり、太原白氏である白居易の子孫を標榜する。

この問題に関しては、[杜・鄭・王 2015]が詳細な考証を行い、「白全周墓誌」の記述を、白居易とその一族の状況や「白敬立墓誌」の文と照らし、本墓誌の記述を撰者の誤解か附会であると述べ、彼らを非漢人である可能性も示唆しつつ、基本的には漢人とみなす。筆者は、白居易の子孫説を否定する点には同意するが、白全周を漢人とする点には疑問に感じる。すなわち、白全周の父の状況に注目すると、

父文亮、皇不仕。妣京地宋氏。公世聯高望、累代門榮。父自河東樓蕃監盛族、萍泛聿來秦土。初游銀郡、及於白婆村、娶宋氏焉。

とあり、父の白文亮は元來河東樓蕃監（樓煩監）に居住し、のちに銀州へ移動したという。樓煩監は牧場であるから、ここで牧畜業によって繁栄した一族だったと考えられる（後述）。

つぎに、白敬立については、その墓誌に「公家自有唐泊九世、世世夏州武官」とあり、また少なくとも曾祖父～息子の五代にわたり「興寧府都督」を世襲したことが記される。この興寧府はその地点と世襲の状況からみて羈糜州都督府と考えられる。ただし、杜氏は「白敬立墓誌」の祖先に関する記述を全面的に信じる立場をとり、白敬立一族を、武安君を始祖とする北辺の夏州に流れて来た一族で、興寧府都督を世襲する遊牧化し部落首領となった漢人とみなす<sup>(34)</sup>。

ここで、白奉進（?～937年）なる人物に注目したい。彼は唐末に李克用に起用されてから後唐・後晋と継続して沙陀政権内で活躍した武将である。『旧五代史』巻95 晋書、白奉進伝（p. 1263）では、

字德昇、雲州清塞軍人也。父曰達子、世居朔野、以弋獵為事。奉進少善騎射、後唐武皇鎮太原、奉進謁於軍門、以求自効、武皇納於麾下。

とあり、父の白達子以前より雲州付近の北辺に居住し、騎馬狩猟に長ずる一族だった。この記述と唐後半期の雲州の状況を考えると、彼らは非漢人の可能性が高い。さらに、白奉進の娘は後晋石敬瑭の息子石重信の妻となるが、『旧五代史』巻87 晋書、楚王重信伝には「妃南陽白氏、昭信軍節度使奉進之女也」（p. 1140）とあり、白奉進もまた南陽白氏を名乗る一族だったことが判明する。

零細な事例ではあるが以上をまとめると、少なくとも九世紀後半以降のオルドスから河東にかけては、「武安君白起の後裔である南陽白氏」を標榜する非漢人の一派が存在し、唐末の動乱のなかで党項政権や沙陀政権に

<sup>(34)</sup> [杜 2007: p.87]。[牛 2009]も白敬立を漢人とする（p. 3）。

それぞれ吸収されていったとみられる。

ここで百姓の非漢人についてみれば、①稽胡（歩落稽）、②龜茲、③吐谷渾が知られる<sup>(35)</sup>。

①については、『旧唐書』卷 83 程務挺伝に「永淳二年（683）、綏州城平県人白鉄余率部（歩）落稽之党拋城県反、偽称尊号、署百官……。詔務挺与夏州都督王方翼討之」（p. 2785）とあるように、部落単位で綏州に居住し、その規模は県城に抛って反乱を起こせるほどであった。また唐側の対応から、夏州都督の管轄内であったことも判明する。ただし、唐後半期における彼らの消息はつかめない。

②に関して、姚薇元氏は唐代の龜茲人の例として白孝徳のほか太原を貫籍とする白居易の一族（白敏中・白行簡など）をあげる<sup>(36)</sup>。さらに銭伯泉氏は、漢唐間における龜茲人の中国内地拡散の状況を考察するなかで、白敏中の女婿皇甫煒が妻白氏のために撰した墓誌<sup>(37)</sup>などを用い、この白氏一族が龜茲王族の白孝徳に連なる家系であり、彼らが武安君白起を始祖とするのは附会であると指摘した。また太原を貫籍とするのは、北魏の時期に白氏の遠祖白包が太原太守となったことに由来すると述べる<sup>(38)</sup>。

③に関しては、上述の如く、唐末から北宋にかけてオルドスから代北を中心に百姓吐谷渾の活動が顕著であった。

以上から、南陽白氏については、第一に、白居易を代表とする太原白氏とは始祖を同じく武安君白起としながらも、貫籍を太原に繋げず南陽とすることは、とりもなおさず彼らとは別系統であることを表明するものであろう。第二に、白敬立が興寧府都督を世襲していた点、白全周の父白文亮が唐後半期には河東に居住しかつ牧畜業に従事していた点、そして白奉進が唐末に雲州に居住し、騎馬狩猟に長ずる一族だった点に鑑みれば、彼らは吐谷渾系統の一派ではなかろうか。

ただし、彼らがなぜ貫籍を南陽とするのかは現在のところ不明である。定難軍にはさらに南陽を貫籍とするソグド姓の何氏墓誌も 2 点（後晋「何徳璘墓誌<sup>(39)</sup>」・北宋「何公墓誌<sup>(40)</sup>」）出土している。残念ながら、これら

(35) ①、②については姚薇元『北朝胡姓考（修訂本）』中華書局、2007 年（初版 1962 年）、pp. 319-320、398-404 参照。

(36) 前掲姚薇元『北朝胡姓考（修訂本）』pp. 402-403。

(37) 「皇甫氏（煒）夫人（白氏）墓銘并序」。吳鋼主編『全唐文補遺』7、三秦出版社、2000 年、pp. 134-135。

(38) 銭伯泉「漢唐龜茲人的内遷及拡散」『西域研究』2001-2、pp. 15-18。

(39) 『榆林碑石』拓本 p. 79、録文 pp. 249-250、『党項西夏碑石整理研究』pp. 100-103。

(40) 『榆林碑石』拓本 p. 83、録文 pp. 254-256、『党項西夏碑石整理研究』pp. 114-119。

の墓誌にも南陽を貫籍とする由来は記されていない。かつて榮新江氏がソグド姓の貫籍・郡望問題を解明したが<sup>(41)</sup>、彼らが貫籍を南陽とする理由も必ずあると思われる。今回は解明に至らなかったので今後の課題としたい。

## (2) 官営牧場と遊牧民 ——楼煩監に注目して

中国の北辺地帯に居住した遊牧民の実態解明は、主に中国王朝との関係の面で、政治・制度・儀礼・軍事・交易を中心に進められてきた。またこれと重なるが、ユーラシアの各地に様々な状況に適応しながら存在したソグド人、とりわけ遊牧化したソグド人の実態解明が契機となって進展した面もある。そのひとつが唐の西北辺境におけるソグド人の生業としての牧馬業に関する研究である。

武威安氏・固原史氏関係の石刻史料などをもとに山下将司氏が隴右・夏州の監牧の状況について<sup>(42)</sup>、また榮新江氏も夏州の監牧と六胡州の牧馬業との関係について考察した<sup>(43)</sup>。これらは唐前半期の監牧経営最盛期に、唐の国馬生産の中心地においてソグド人がその実質的運営を担っていたことを明らかにした。しかし、オルドスなど華北の国馬生産地にはソグド人以外にもテュルク・党項・吐谷渾などの遊牧民もすでに相当の規模で居住しており、彼らと官営牧場との関係がいまだ不明である。

ところで、『旧唐書』巻104 哥舒翰伝をみると、天宝八載(749)の対吐蕃戦において「以朔方・河東群牧十萬衆委翰總統攻石堡城」(p. 3213)と記される。この群牧の衆の十萬という数は、誇張があるとしても、ソグド人と漢人牧子だけの数とは考え難い。また、戦闘員に転用可能なことから、多くはこの地に居住する遊牧部落民であったとみられ、ソグド人以外の遊牧民が唐の官営牧場経営に関わっていたことが推測される<sup>(44)</sup>。さらに、この朔方・河東の牧場は、安史の乱後の馬政を支える拠点となった。

周知のように、唐後半期の監牧経営は多く失敗に終わったが、嵐州楼煩

<sup>(41)</sup> 榮新江「北朝隋唐粟特人之遷徙及其聚落」同著『中古中国与外来文明(修訂本)』生活・読書・新知三聯書店、2014年、pp. 55-58, 87-89(論文初出1999年)、および「安史の乱後粟特胡人的動向」同著『中古中国与粟特文明』生活・読書・新知三聯書店、2014年、pp.88-100(論文初出2003年)。

<sup>(42)</sup> 山下将司「唐の監牧制と中国在住ソグド人の牧馬」『東洋史研究』66-4、2008年。

<sup>(43)</sup> 榮新江「唐代六胡州粟特人的畜牧生活形態—2007年西北農牧交錯地帯城址与環境考察紀略」同著『中古中国与粟特文明』(論文初出2012年)。

<sup>(44)</sup> 馬俊民・王世平『唐代馬政』西北大学出版社、1996年、pp. 106-107では、『新唐書』巻135 哥舒翰伝の「群牧兵十萬」(p. 4570)の表記から、漢人牧子が兵員化したものとみなすが、『冊府元龜』巻369 将帥部攻取門2は「群牧之衆十萬」とし『旧唐書』の表記と同様「衆」とする(宋本p. 907、明本p.4387)。

監・銀州監・同州沙苑監・蔡州龍陂監が比較的長期運営された<sup>(45)</sup>。このうち、唐朝が最も重視したのが安史の乱以前から存続する樓煩監である。馬俊民氏らが指摘するように、安史の乱後の監牧経営は宦官勢力が掌握していくが、とくに樓煩監牧使の職は、閑廐使に代わって台頭した飛龍使が担ったのであり<sup>(46)</sup>、樓煩監はいわば内廷直属の監牧であった。

上述のように、唐後半期も監牧の経営が行われたとはいえ、隴右喪失後の唐国内における馬匹生産は需要を満たすことができず、主にウイグルと北辺羈縻州からの購入に頼らざるを得なかった。ウイグルとの交易は、長安のほかに太原で恒常的に行われていた。丸橋充拓氏によれば、ウイグル・北辺羈縻州（とくに党項）それぞれとの交易には層次の違いがあり、ウイグル馬は国家が、党項馬は民間が扱ったという<sup>(47)</sup>。たとえば、『旧唐書』巻 165 柳公綽伝（p. 4304）にみられるように、ウイグルの場合は朝貢使節団として河東節度使による迎接・互市などが行われ、その方式は「太原故事」とされていた<sup>(48)</sup>。

ここではウイグルが「馬万匹」を太原にもたらしているが、常にこの規模だったとすると、すべての馬を毎回長安に運んだ<sup>(49)</sup>とは考えがたい。おそらく近隣の樓煩監に収容したのではないだろうか。武宗期において、烏介可汗率いるウイグル難民の南下に対し、宰相李徳裕は、軍馬の確保を開始するにあたり、河東節度使に当地の諸蕃から壯馬を買い、樓煩監に収容させる案を提出する<sup>(50)</sup>。ここから、朝廷の指揮のもとで、太原の河東節度使が樓煩監と関係をもつこと<sup>(51)</sup>、また樓煩監は、外来馬を収容できる規模と条件を有したことが判明する。

(45) 前掲馬俊民・王世平『唐代馬政』pp. 96-97。

(46) 前掲馬俊民・王世平『唐代馬政』p. 30。

(47) 丸橋充拓「唐代後半の北辺経済再考」『アジア史学論集』10、2016年、pp. 47-49。

(48) 是歳（大和四年）、北虜遣梅祿將軍李暢以馬万匹來市、託云入貢。所經州府守帥仮之礼分、敵其兵備。留館則戒卒於外、懼其襲奪。太原故事、出兵送之。暢及界上、公綽使牙將祖考恭單馬勞問、待以修好之意。暢感義出涕、徐驅道中不妄馳獵。及至、關牙門、令訳引謁、宴以常礼。及市馬而還、不敢侵犯。

(49) 外来馬の規定については、林美希「唐前半期の厩馬と馬印一馬の中央上納システム」『東方学』127、2014年、p.5 参照。

(50) 李徳裕「請市蕃馬狀」『会昌一品集』巻 14（傅琰琮・周建国校箋『李徳裕文集校箋』河北教育出版社、2000年、p. 261）。

(51) 『旧唐書』巻 39 地理志 2、河東道に、「憲州下、旧樓煩監牧也。……至徳後、屬内飛龍使。旧樓煩監牧、嵐州刺史兼領。貞觀（貞元の誤り）十五年、楊鉢為監牧使、遂專領監司、不係州司」（p.1486）と、一般には地方政府とは管轄を別にした。

上述のように、楼煩監は内廷と密接な関係にあったが、これは安史の乱による情勢変化により、河東がウイグル馬の主要購入ルートのひとつとなり、楼煩監には恒常的に馬匹が供給される状況があったからだと推測される。

この楼煩監における直接の牧馬の担い手に関しては、前掲の「白全周墓誌」が注目される。白全周の生没が 868～929 年で次男であるので、父白文亮は概ね 830、840 年代（文宗～武宗期）生まれであろう。また「河東楼蕃（煩）監盛族」という表記から、父の代以前からこの地において牧畜業で繁栄した吐谷渾系統の一族とみられる。栄新江氏は、開元二年（714）に唐朝が空名の告身をもって六胡州のソグド人から馬を獲得したことから、彼らが監牧馬以外にも私馬およびその他家畜を飼養していたのではないかと指摘する<sup>(52)</sup>。おそらく白文亮一族が「盛族」となるには、やはり私的に家畜を飼養していただろう。このように、安史の乱後、楼煩監は唐朝にとって馬匹保有の最重要監牧となったが、その直接の担い手には吐谷渾系統の遊牧民が含まれていたと考えられる。

なお、玄宗期ではあるが、前章で紹介した吐谷渾可汗家の「慕容環墓誌」には、彼の父慕容相が安史の乱勃発直前まで、太僕少卿の職にあったことを記す。唐の馬政と吐谷渾との関わりを示す史料として注目される<sup>(53)</sup>。

## おわりに

本稿では、まず、唐五代を中心としたオルドス・河東の党項・吐谷渾関連の主に 2000 年以降出土の石刻史料およびそれを用いた研究を粗粗整理・紹介した。現在も史料状況は変化しているので、引き続き注視していく必要がある。また、党項・吐谷渾の人々の実態を解明すべく、一部の石刻史料を用い、貫籍問題および官営牧馬業との関わりに注目して考察を試みた。文献にのみ頼っていたかつての状況から比べれば、飛躍的に情報量が増えたとはいえ、まだ不明な点が多い。より柔軟にアプローチしていく必要があるだろう。

---

<sup>(52)</sup> 前掲栄新江「唐代六胡州粟特人的畜牧生活形態」p.74。

<sup>(53)</sup> 五代後唐の馬政と吐谷渾との関係については、周偉洲『吐谷渾史』pp.193-195。

## ●党項・吐谷渾関係文献リスト

※新出・新公表の石刻を扱うものを中心とし、すべての著作を網羅しているわけではない。

## 【中文】

- 陳璋 2010 「後周綏州刺史李彝謹墓誌銘考釈」『西夏学』5, pp. 241-247.
- 陳璋 2011 「後晋定難軍撰節度判官兼掌書記毛汝墓誌銘考釈」『西夏学』8, pp. 215-219.
- 陳璋 2013 「後晋夏銀綏宥等州觀察支使何德璘墓誌銘考釈」『中国国家博物館館刊』2013-3, pp. 67-75.
- 陳璋 2014a 「北宋定難軍節度觀察留後李彝筠墓誌研究」『西夏研究』2014-4, pp. 58-63.
- 陳璋 2014b 「新出吐谷渾王族慕容環墓誌研究」『中国边疆史地研究』24-4, pp. 62-71.
- 陳璋 2015a 「後晋綏州刺史李仁宝墓誌銘考釈」『西夏学』11, pp. 143-148.
- 陳璋 2015b 「中古時期党項与粟特關係論考」『中国史研究』2015-4, pp. 67-92.
- 鄧輝・白慶元 2002 「内蒙古烏審旗發現的五代至北宋夏州拓拔部李氏家族墓誌銘考釈」『唐研究』8, pp. 379-394.
- 翟麗萍 2015 「夏州節度使文武僚属考——以出土碑石文献为中心」『西夏学』11, pp. 144-150.
- 杜建録 2007 「党項夏州政權建立前後的重要記錄——唐故延州安塞軍防禦使白敬立墓誌銘考釈」『寧夏師範学院学報(社会科学版)』28-2, pp. 86-88. (同著『党項西夏碑石整理研究』『西夏史論集』に収録)
- 杜建録 2013 「夏州拓跋部の幾個問題——新出唐五代宋初夏州拓跋政權墓誌銘考釈」『西夏研究』2013-1, pp. 39-43. (同著『党項西夏碑石整理研究』『西夏史論集』に収録)
- 杜建録・白慶元・楊滿忠・賀吉徳 2006 「宋代党項拓跋部大首領李光睿墓誌銘考釈」『西夏学』1, pp. 102-109. (杜建録著『党項西夏碑石整理研究』『西夏史論集』に収録)
- 杜建録・鄭文韜・王富春 2015 「後唐定難軍節度押衙白全周墓誌考釈」『寧夏社会科学』2015-2, pp. 129-135. (杜建録著『党項西夏碑石整理研究』『西夏史論集』に収録)
- 杜維民 2014 「唐夏州張寧墓誌考釈」『西夏研究』2014-3, pp. 62-66.
- 段志凌 2014 「陝西延安進出土唐吐火羅人羅何含墓誌」『文物』2014-8, pp. 63-68.

- 高建国 2013a 「北宋《折克柔墓誌銘》考积」『河北大学学报（哲学社会科学版）』38-2, pp. 30-33.
- 高建国 2013b 「宋《折惟正墓誌銘》与府州折氏的幾個問題」『宋史研究論叢』14, pp. 510-525.
- 高建国 2014a 「府州折氏族源、改姓的新証拠——介紹兩方新墓誌」『西夏学』9, pp. 110-115.
- 高建国 2014b 「府州折氏与遼的關係」『内蒙古社会科学（漢文版）』35-5, pp. 68-71.
- 高建国 2016a 「折家将文献考論（一）」『延安大学学报（社会科学版）』2016-1, pp. 116-120.
- 高建国 2016b 「《折克行神道碑》補积——兼論《府谷県志・兩種》墓誌点校錯訛」『中国地方誌』2016-9, pp. 43-47.
- 高建国 2016c 「陝北歷史文化暨宋代府州折家将歷史文化學術研討会総述」『榆林学院学报』26-5, pp. 56-61.
- 高建国 2017 「折家将文献考論（二）」『延安大学学报（社会科学版）』2017-2, pp. 118-123.
- 劉翠萍 2015 「府州折氏族源与党項化的再思考」『西夏研究』2015-4, pp. 9-14.
- 牛達生 2008 「拓跋思恭卒年考——唐代《白敬立墓誌銘》考积之一」『陝西歷史博物館館刊』15（同著『西夏考古論考』上海古籍出版社, 2013年, pp. 219-223 に収録）.
- 牛達生 2009 「夏州政權建立者拓跋思恭的新資料——唐代《白敬立墓誌銘》考积之二」『蘭州学刊』2009-1, pp. 1-5（同著『西夏考古論考』pp. 224-235 に収録）.
- 湯開建 2013 「隋唐五代宋初党項拓跋部世次嬗遞考」『西夏学』9, pp. 92-109.
- 王東・楊富学 2014 「五代宋初西北政治格局之再思考——以北漢与党項關係為中心的考察」『蘭州学刊』2014-1, pp. 23-28, 40.
- 王富春 2004 「唐党項族首領拓跋守寂墓誌考実」『考古与文物』2004-3, pp. 73-81（陳政和主編『上郡膚施初考』pp. 100-113 に収録）.
- 薛正昌 2016 「府州折氏家族析論」『西夏研究』2016-1, pp.38-41.
- 閔洞賓 2015 「折氏世襲府州的原因探析」『榆林学院学报』25-3, pp. 73-76.
- 周峰 2013 「張寧墓誌所見唐朝与党項的戰爭」『西夏学』9, pp. 70-75.
- 周偉洲 2004 「陝北出土三方唐五代党項拓跋氏墓誌考积——兼論党項拓跋氏族源問題」『民族研究』2004-6, pp. 70-81（同著『早期党項史研究』pp. 240-260 に収録）.
- 周偉洲 2010 「早期党項拓跋氏世系考辨」『西夏研究』2010-1, pp. 5-11.
- 周偉洲 2011 「蘭池都督府与蘭池州」『中国歷史地理論叢』2011-1（同著『新

出土中古有関胡族文物研究』 pp.228-233 に収録)。

周偉洲 2015 「早期党項拓跋氏世系補考」『西夏研究』 2015-4, pp. 3-8.

【日文】

森部豊 2010 「北中国における吐谷渾とソグド系突厥——河北省定州市博物館所蔵の宋代石函の紹介と考察」同著『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』関西大学出版部, pp. 211-234.

【著書・論文集・資料集】

杜建録主編 『党項西夏文献研究—詞目索引、注釈与異名対照』全4巻, 中華書局, 2011.

杜建録 『党項西夏碑石整理研究』(西夏文献研究叢刊), 上海古籍出版社, 2015.

杜建録 『西夏史論集』上海古籍出版社, 2016.

韓蔭晟編 『党項与西夏資料匯編』全9巻, 寧夏人民出版社, 2000.

康蘭英主編 『榆林碑石』(陝西金石文献石刻匯編), 三秦出版社, 2003.

寧夏大学西夏学研究中心・中国国家図書館・甘肅五涼古籍整理研究中心編 『中国蔵西夏文献』全20巻, 甘肅人民出版社・敦煌文芸出版社, 2005-2007.

折武彦・高建国 『府州折家将歴史文化研究論文集』内蒙古人民出版社, 2014.

湯開建 『党項西夏史探微』商務印書館, 2013 (繁体字初版 2005)。

周偉洲 『早期党項史研究』中国社会科学出版社, 2004.

周偉洲 『新出土中古有関胡族文物研究』(西部边疆研究叢書), 社会科学文献出版社, 2016.

※追加

陳政和主編 『上郡膚施初考』陝西人民出版社, 2010. (※白賽玲「横山墓誌研究」は本書を参照する。)

曾曉梅・吳明冉集積 『羌族石刻文献集成』全4巻, 巴蜀書社, 2017.

陳璋 『西夏番姓大族研究』(西夏学文庫第1輯), 甘肅文化出版社, 2017.

杜建録 『西夏与周边民族關係』(西夏学文庫第1輯), 甘肅文化出版社, 2017.

周偉洲 『党項西夏史論』(西夏学文庫第2輯), 甘肅文化出版社, 2017.



## ●附録 1

- ① 『中国蔵西夏文献』18巻（金石編：碑石）収録拓跋氏・定難軍拓跋李氏関係墓誌

1	唐静辺州都督拓拔守寂墓誌銘并蓋	9	後漢沛国郡夫人里氏墓誌銘
2	唐延州安塞軍防禦使白敬立墓誌銘	10	後周綏州刺史李彝謹墓誌銘
3	後唐永定破丑夫人墓誌銘并蓋	11	後周綏州太保夫人祁氏神道志銘
4	後晋虢王李仁福妻瀆氏墓誌銘	12	宋定難軍管内都指揮使康成墓誌銘并蓋
5	後晋定難軍撰節度判官毛汶墓誌銘并蓋	13	宋撰夏州觀察支使何公墓誌銘并蓋
6	後晋夏銀綏宥等州觀察支使何德麟墓誌銘并蓋	14	宋定難軍節度使李光睿墓誌銘并蓋
7	後晋定難節度副使劉敬瑋墓誌銘并蓋	15	宋定難軍節度觀察留後李繼筠墓誌銘并蓋
8	後晋綏州刺史李仁宝墓誌銘并蓋	16	宋管内蕃部都指揮使李光遂墓誌銘并蓋

※[鄧・白 2002]と『榆林碑石』収録のものを含む。「白全周墓誌」は未収録。

- ② 白賽玲「横山墓誌研究」（西北大学 2011 年）収録横山県内出土唐五代墓誌

1	阿才墓誌銘（久視 2 年死去，享年 82）△	7	娥冲虚墓誌銘★
2	石才墓誌銘（乾封 4 年死去）	8	馮自興墓誌銘（大中 8 年死去，享年 49）△
3	張珪墓誌銘（開元 9 年死去，享年 50）	9	李公政墓誌銘★△
4	王節墓誌銘（開元 16 年死去，享年 74）	10	竇伯歳墓誌銘（乾符年間死去，享年 74）
5	拓拔寂墓誌銘★△	11	白全周墓誌銘（天成 4 年死去，享年 61）
6	王友賢墓誌銘（至徳 2 載死去）△	12	劉敬瑋墓誌銘★

★：『榆林碑石』と重複するもの。 △：『上郡膚施初考』と重複するもの。

## ③ 高建国「鮮卑族裔府州折氏研究」(内蒙古大学 2014 年)収録府州・折氏関係墓誌

1	唐麟州刺史折嗣倫碑	11	折克行神道碑碑陰 ★	21	張構墓誌銘
2	折御卿墓誌殘文★	12	折克儉墓誌銘▲	22	張括墓誌銘
3	折惟正墓誌銘▲	13	折克禧墓誌銘▲	23	楊宗閔墓碑
4	折惟信墓誌銘殘文▲	14	折克臣墓誌銘▲	24	楊震墓碑
5	(折惟忠妾)李夫人墓誌銘★	15	折可大殘碑	25	唐衛嘉進墓誌銘 ★
6	折繼閔神道碑★	16	折可存墓誌銘★	26	宋宗延英墓誌銘 ★
7	(折繼祖妻)慕容夫人墓誌銘▲	17	折可復夫婦墓誌 (妻陳氏)★	27	宋王光甫墓誌銘
8	折繼新、折繼全墓誌 ★	18	折可適墓誌銘	28	孫覽墓誌銘
9	折克柔墓誌銘▲	19	(折彥文妻)曹夫人墓誌銘★	29	楊琪墓誌銘
10	折克行神道碑★	20	吳堡摩崖刻石	30	杜陟墓誌銘

★：『榆林碑石』と重複するもの。

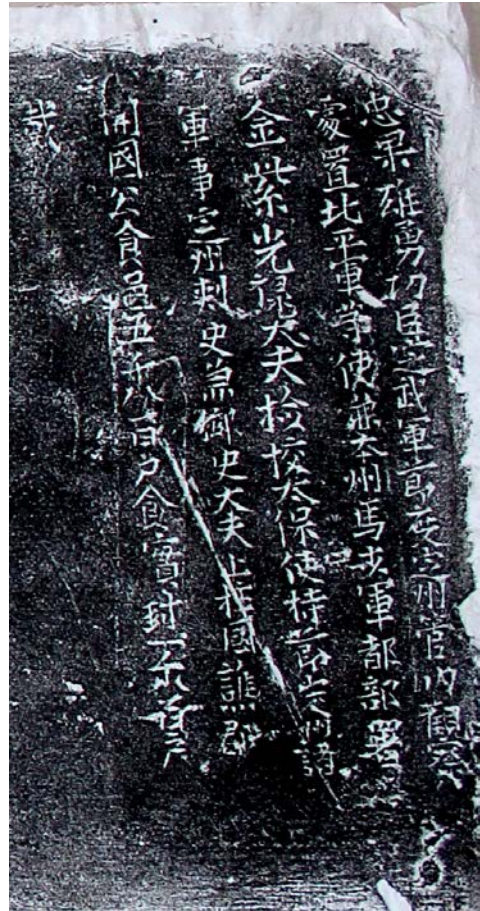
▲：2012年に府谷県文物管理委員会が新たに収蔵したもの。

- 25 張福妻田氏 趙雅妻劉氏 男進超 女趙氏
- 26 女四姐 女弟子楊氏 王氏女弟王訓母
- 27 趙氏 王氏
- 28 陳和崇妻□氏 男守信 次男
- 29 鄭王留新鄴氏 孫子郭□留
- 30 孫女藥〃
- 31 于惠<sup>田</sup>妻張氏 女<sup>田</sup>陳序女陳郎<sup>田</sup>婦
- 32 賈副妻趙氏女吳長女
- 33 田<sup>田</sup>妻李氏 次男田旻 小男田<sup>田</sup>睦
- 34 女王命 氏 鄭氏
- 35 賈氏 康氏 張祚 妻劉氏
- 36 韓嘉盛 妻□氏 李万超妻史氏 張
- 37 <sup>田</sup>燕緒耿 杜守□ 劉昇
- 38 李威 妻□氏 男李節 女
- 39 女李氏女李氏 □留氏 女
- 40 □□□ 兄超 妻康氏 □
- 41 <sup>田</sup>馬

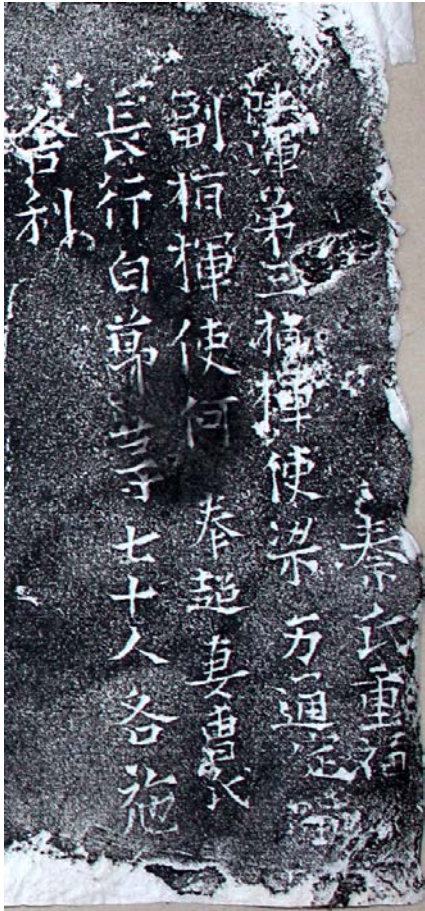
【注】

- ① 一部の異体字については正字を用いた。
- ② 行番号は便宜上付した。森部积文では、読まれなかった行もあり、本録文と番号は対応しない。また本録文では拓本ごとに番号を振りなおした。
- ③ 空行については森部积文の表記に従う。

拓本① 冒頭部



拓本② 冒頭部



【拓本②】(森部《第2側面》)

- 1 秦氏重福
- 2 吐渾第三指揮使梁万通定留
- 3 副指揮使何奉超 妻曹氏
- 4 長行白節等七十人各施
- 5 舍利
- 6 驍武第四指揮使韓贊妻穆氏
- 7 男普又次男文處 小男十郎 女九娘子十一娘子
- 8 副指揮使王信妻成氏
- 9 男宜哥 女小姐定姐
- 10 校練使曹妻石氏 馬
- 11 弟子任柔 妻陳氏 長男守麟
- 12 次男守訓 次男守旻 小男守文
- 13 大姐蔡郎婦 二姐段郎婦
- 14 新婦郭氏 楊氏 朱氏 趙氏
- 15 孫翁兒 小翁兒 孫百勝女 慶
- 16 王興善
- 17
- 18 史氏女弟子同氏女
- 19 僕遵妻□氏 楊遵 楊緒 楊□
- 20 吐渾第二指揮使米海山
- 21 第四指揮使安隆
- 22 副指揮使何訓
- 23 第五副指揮康澄
- 24 吐渾使白譜

【拓本③】(森部《第3側面》※第1側面裏側)

- 1 驍武第四指揮第三軍使高斌
- 2 婆馬氏 父贊 母鄔氏
- 3 妻崔氏 男韓留比丘女嬌姐
- 4 第四軍使田贊 繼父武唐
- 5 妻李氏 女旺伶 勝姐 俵喜
- 6 男留 不喜
- 7 第一副兵馬使韓斌 亡父珂
- 8 母胡氏 兄祚 妹要姐 新婦趙氏
- 9 宋氏 姓尹九 馬氏女
- 10 第二副兵馬使張訓
- 11 父進 妻王氏 男翁伶
- 12 女菩薩女 和美
- 13 第三副兵馬使李謙父邁
- 14 母馬氏 □李貴嫁□氏 妻留氏
- 15 男喜兒 □將胡之
- 16
- 17 □□ 康得選 崔氏女弟子康三 索進
- 18 女弟子康氏男 □ 崇間 崇吉
- 19
- 20
- 21 李遇妻李氏 男惟吉妻任氏
- 22 □□□
- 23 任瓊妻李氏 女都賽 男吳留 女弟子董氏
- 24 女弟子周氏 女弟子張氏 女弟子蘇氏

●附録2 [逆ページ配列]

定州市博物館蔵 宋代石函銘文

【拓本①】(森部《第1側面》)

- 1 忠果雄勇功臣定武軍節度定州管内觀察
- 2 處置北平軍等使兼本州馬步軍都部署
- 3 金紫光祿大夫檢校太保使持節定州諸
- 4 軍事定州刺史兼御史大夫上柱國譙郡
- 5 開國公食邑五千八百戶食實封一千八百戶
- 6 戴
- 7 〔
- 8 〔
- 9 觀察推官閻易宗妻李氏
- 10 知勾孔目官楊幸妻賈氏
- 11 男王留女神姐
- 12 〔
- 13 時大宋至道元年歲次乙未四月丁丑
- 14 朔八日甲申 時葬
- 15 創修院功德主講維摩上生經 沙門義演
- 16 小師講法花經僧惠岩 講因明論僧惠月
- 17 供養主比丘惠顯 惠隆 惠璘
- 18 惠實 惠誠 惠朗
- 19 頭供奉官承天軍兵馬監押劉 隱
- 20 妻董氏 男唯岳 女劉氏 菩薩女
- 21 姨石氏 殷氏 焦氏
- 22 三班奉職五州巡檢使樂守忠
- 23 都維那李珍 妻孫氏 女劉郎婦
- 24 小女隣哥 弟守虎 小舅孫昇
- 25 副維那史從真 妻子氏 男元喆
- 26 新婦楊氏 次男元吉 孫延兒
- 27 舅翁于金 舅婆甄氏
- 28 小女夫張又 妻子氏 男謝留 慈兒
- 29 王煦妻潘氏 守义 重兒
- 30 王小梁氏姐久哥四哥
- 31 善寺比丘尼 悟堅 惠凝 惠朋 智嵩
- 32 妙果 美貞 鑿惠 鑿仙 吳氏 智朋
- 33 惠花 增超 躰全 永能 故先 智真
- 34 惠明 審靜 明晤 惠真 皈仙 超美
- 35 普通 妙通 惠明 法仙 賽之 妙采
- 36 李氏 耿氏 宋氏 楊氏 妙真
- 37 李欽 女王郎婦 □女史郎婦 三姐
- 38 前攝密州長史馬彥珍施餅八隻
- 39 并舍利 小男伴哥 吐渾使白謙
- 40 施石函弟子前攝橫海軍節度巡官王昭信
- 41 男文林郎守果州流溪縣尉兼主簿事 玘
- 42 次男珮 小男璨 小女超姐 孫榮哥
- 43 孫慶哥 孫女翁女 小超女
- 44 女弟子曹氏 新婦孫氏 新婦張氏

文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造  
の研究(平成 27～29 年度科学研究費補助金(基盤研究 C)  
成果報告書)

発 行 日 平成 30 年 (2018 年) 3 月 15 日  
編集・発行 村井恭子 (神戸大学)

本科研は JSPS 科研費 (課題番号 15K02894) の助成を受  
けたものである。